

2. 狩野川をめぐる祭と信仰にみる歴史的風致

伊豆の国市の平野部中央を北流する狩野川^{かののがわ}は、古来より、人々の暮らしと密接に結びついている。農業用水として、流域の田畑を潤してきたのはもちろん、陸上交通の整備が進むまでは、舟運による輸送経路として、重要な役割を果たしてきた。鎌倉幕府の執権北条氏の館（史跡北条氏邸跡・円成寺跡）が、狩野川に臨む守山の麓に営まれたのも、交通路としての狩野川の重要性によるところが大きいと考えられる。江戸時代には、河口の沼津港から狩野川各所に設けられた河岸を結ぶ、物流のネットワークが形成されていた。



狩野川での鮎釣り

また、鮎などの漁場（狩野川は鮎の友釣り発祥の地のひとつとして知られる）として、今日まで豊かな恩恵をもたらしている。しかしその一方で、たび重なる洪水によって、流域に甚大な被害を与えてきたことも事実である。

流域に暮らす人々にとって狩野川は、その支流も含めて、日々の生活に密着した親しみ深い存在であると同時に、深刻な被害をもたらす暴れ川として畏怖される存在でもあった。そのため、長年にわたって治水・利水のための努力が積み重ねられてきた。そして、「かわかんじょう」等の祭や慰霊祭などを通じて、水害を避け、水難者を慰霊しようという習俗が育まれ、現代まで継承されてきたのである。

流域に暮らす人々にとって狩野川は、その支流も含めて、日々の生活に密着した親しみ深い存在であると同時に、深刻な被害をもたらす暴れ川として畏怖される存在でもあった。そのため、長年にわたって治水・利水のための努力が積み重ねられてきた。そして、「かわかんじょう」等の祭や慰霊祭などを通じて、水害を避け、水難者を慰霊しようという習俗が育まれ、現代まで継承されてきたのである。

(1) 狩野川をめぐる祭と信仰にみる歴史的風致を構成する建造物

①八坂神社

狩野川右岸の四日町地区の鎮守である八坂神社には、須佐之男命^{すさのおのみこと}と奇稲田姫命^{くしなだひめのみこと}の二柱とともに牛頭天王^{ごずてんのう}が祀られている。寄棟造銅板葺の拝殿^{おおいや}と覆屋があり、覆屋の中に構造形式から江戸時代後期のものとみられる流造の本殿^{おおやま}を納める。また、末社として境内に大山祇神社^{おおやまづみ}が祀られている。



八坂神社

牛頭天王については、正長元年（1428）に起きた「酉の満水」と呼ばれる洪水の時、狩野川上流の梅木村（現伊豆市）からご神体の木像が四日町に漂着し、それを祀ったという伝承がある。ご神体が流れ着いたとされる場所は、八坂神社から道をはさんだ向かい側にあり、現在も「降臨の地」として大切にされ、お天王さんの際に神輿が渡御する、お旅所となっている。

②守山八幡宮

守山八幡宮は、狩野川右岸の寺家地区の鎮守である。隣村であるにもかかわらず、八坂神社でお天王さんが行われる際、八坂神社の神輿が渡御することで知られている。祭神はほんだわけのみこと菅田別命・おおやまつみのみこと大山祇命・このはなさくやひめのみこと木花開耶姫命の三柱である。切妻造平入鋼板葺の拝殿と覆屋を持つ。守山八幡宮の宮司である榎家に伝来する『守山八幡宮記録抄』には、当社の本殿は、寛永9年(1632)にくのうざん久能山東照宮祭主さかきばらてるひさ榎原照久が造営したとある。



守山八幡宮

③神益麻志神社

狩野川左岸の神島地区の鎮守であるかんます まし神益麻志神社の境内は、長年にわたって後述する「かわかんじょう」で用いられる筏の材料となる藁縄を作る場所となっていた。祭神はながしらはのみこと長白羽命他四柱である。入母屋造平入鋼板葺の拝殿と覆屋があり、流造の本殿を納める。天保13年(1842)の棟札が伝来している。



神益麻志神社

④狩野川水害慰霊碑

昭和33年(1958)9月の狩野川台風は、1,040人にのぼる死者・行方不明者を出し、流域に甚大な被害をもたらした。あまりにも大きかった狩野川台風の打撃から人々が立ち上がり、日々の生活を取り戻していく過程では、流失した家屋の建て直し、道路や橋などの交通網の復旧、泥に埋まった田畑の復活などとともに、亡くなった人々への慰霊の営みが必要であった。そして、それを顕す形あるものとして、川沿いの各所に慰霊碑が建立された。

表2-2-1 狩野川台風による被害状況(伊豆の国市内)

昭和33年(1958)9月

自治体名 (当時)	死者	負傷	行方 不明	全潰	半潰	流失	床上 浸水	床下 浸水
韮山町	66	212	2	50	206	128	874	68
伊豆長岡町	2	26		4	20	3	618	115
大仁町	202	236	18	41	71	147	179	312

表 2-2-2 狩野川台風等水難者慰霊碑

地域	地区	場 所	名 称	建立年
大仁町 (当時)	大仁	大仁橋北側	狩野川水死者供養塔	大正 4 年 (1915)
	中島	中島公民館近く	狩野川台風殉難者慰霊碑	昭和 39 年 9 月 (1964)
	御門	御門公民館横	狩野川台風殉難者慰霊碑	昭和 39 年彼岸 (1964)
	白山堂	白山神社参道	狩野川台風殉難者供養塔	昭和 37 年 8 月 (1962)
	田京	広瀬神社北側下田街道沿 い	田中村洪水殉難者供養塔 (深沢川)	大正 10 年 (1921)
	神島	神島橋西側	狩野川外諸川水死招魂碑	明治 39 年 (1906)
伊豆長岡町 (当時)	壺之上	菖蒲橋北側	狩野川放水路竣工記念碑	昭和 40 年 7 月 (1965)
		菖蒲橋北側	久保田豊胸像	昭和 42 年 10 月 (1967)
	北江間	函南町日守へ続く道沿い	狩野川台風殉難供養塔	不明
韮山町 (当時)	南條	千歳橋東側	狩野川台風殉難者慰霊碑	昭和 49 年 9 月 (1974)

資料：伊豆碑文集

図 2-2-1 狩野川水害慰霊碑および関連石碑等位置図



(2) 狩野川をめぐる祭と信仰

ア 八坂神社のお天王さん

八坂神社では、毎年7月中旬の日曜日に「お天王さん」という祭が、四日町地区に住む同社の氏子によって営まれている。この祭の創始年代は詳らかでないが、大正7年(1918)刊行の『静岡県田方郡誌』に「菰山村四日町の天王祭は、最も有名にして、附近より群集する者多し」と記されており、この頃既に盛大な祭としてよく知られていたことがわかる。

お天王さんには、疫病退散と風水害避けの霊験があるとされており、毎年御殿場から参詣する講もあったという。またこの祭では、四日町地区内のみならず、寺家の守山八幡宮及び宮司榎家邸内に祀られた御幣王子社にも神輿が渡御する。祭では、神輿の出発に先立ち、担ぎ手たちの禊ぎが行われる。かつては、狩野川の流れに入って身を清めていたが、近年では氏子総代が手桶の水を笹の葉で担ぎ手たちにかける形となっている。

お清めの後、2基の神輿(祭神である須佐之男命と奇稻田姫命)は、行列を組んで八坂神社を出発する。太鼓と金棒、天狗を先頭として、御幣・錦旗・唐櫃等の諸役、神職・神輿が続き、最後尾を神社総代や地区の役員などが進む。行列は、まず下田街道(国道136号)を挟んで神社の向かい側にある「神降臨の地」に向かい、そこで祭典を行う。その後、四日町地区内を南下して寺家地区に向かう。神輿の通り道には、御神酒等のお供えを持った地区の人々が出て、行列を出迎える。



八坂神社



お天王さん 八坂神社を出発



守山八幡宮での祈禱



牛頭天王 降臨の地

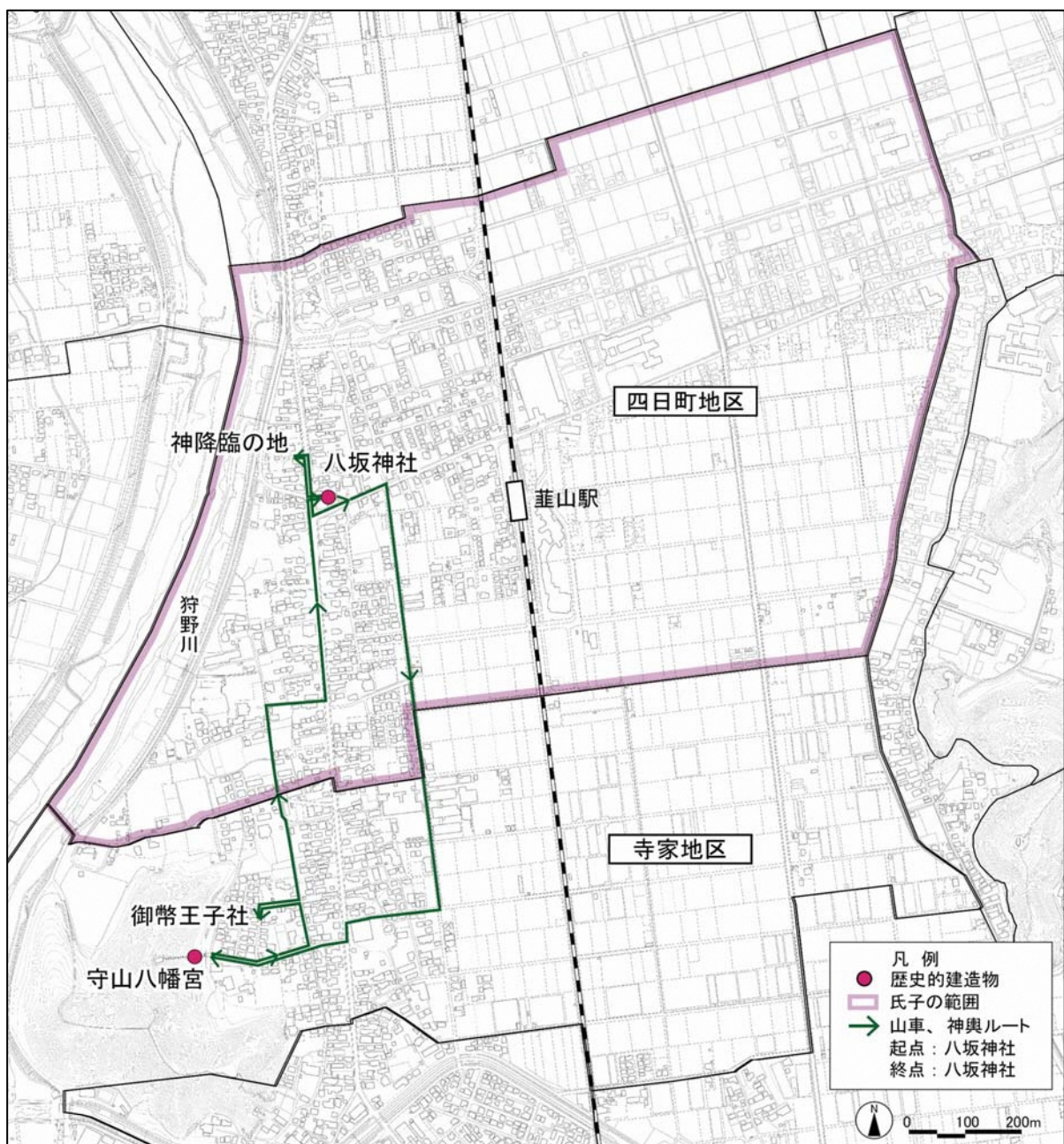


神輿の通り道にお供えを持った地域の人々が出ている

八坂神社の神輿は、寺家地区では守山八幡宮と、同八幡宮の宮司家である槇家敷地内に鎮座する御幣王子社^{みてぐらのおうじ}に渡御する。守山八幡宮にて奉幣した後、神輿は御幣王子社に向かう。御幣王子社では、八坂神社の神職から、守山八幡宮の宮司へと御幣を受け渡す儀式が行われる。その後、神輿は旧下田街道を北上して八坂神社に還御する。

八坂神社の神輿が渡御する守山八幡宮は、狩野川本流と支流の葦山古川の合流地点に位置する守山の中腹に鎮座しているが、洪水で流れ着いたとされる八坂神社の神が、狩野川に臨む守山に渡御するのは、水難を避けようとする人々の祈りの現れであるとも言えよう。

図2-2-2 お天王さん 活動範囲の拡大図



イ かわかんじょう

既に述べたように、狩野川では古来大規模な水害が繰り返し発生してきた。その一方で、狩野川は水利や交通、漁業など、人々の暮らしに欠かすことのできない存在でもあった。災厄と恩恵をもたらす狩野川に対して、流域の人々は様々な祭や習俗・儀礼を通して水害の起こらないことを祈り、盆の時期などに水難者の慰霊を行ってきたのである。

なお、伊豆の国市内には、7月31日から8月3日にかけて盆行事を行う地域と、8月13日から16日にかけて行う地域がある。7月31日からのものを「晦日盆」あるいは「朔日盆」といい、明治時代以降盛んになった養蚕の最盛期を避けて、この時期に行うようになったものである。

狩野川左岸の神島地区では、盆にあたる8月1日の夕方、「かわかんじょう」が行われる。狩野川の水霊を鎮め、水難者の供養とともに地区の安全を願う行事で、伊豆の国市の民俗文化財に指定されている。現在は8月1日にのみ行われているが、元々は8月1日から3日までの3日間実施されていた。大正2年(1913)刊行の『田方郡田中・小室・対馬村誌』に「一、河かんじ 盆ノ一日(八月一日)小若衆各戸ヨリ麦稈ヲ集メ竹ヲ切り来テ筏ノ如クシ中央ニあかしヲ置キテ之ニ火ヲ点シ狩野川ニ流ス人ノ乗り得ル位ノ大サノモノ数箇其ノ他無数ニシテ初夜ノ一偉観ナリ三昼夜連続之レヲ行フ」とある。

約3m四方の竹枠に麦藁を敷き詰めて、厚さ1m程の筏に、長さ5~6m以上の松明を立てたもの(これ自体も「かわかんじょう」と呼ぶ)を、大小合わせて10基ほど用意する。この準備作業は、戦前までは神島地区の小学生男子の役割とされていた。7月中旬から、神島地区の鎮守である「神益麻志神社」の境内で、集めてきた麦藁を叩いて柔らかくし、縄や綱を作る作業が連日行われたという。完成した縄や綱、藪から切り出された枯竹などの材料は、神益麻志神社の東側にあたる狩野川の河原に運ばれ、そこでかわかんじょうの組立が行われた。現在、この作業は地区の人々が協同で行っているが、材料や作り方は、古来のやり方が受け継がれている。

8月1日の夕刻、狩野川の流れの中へと浮かべられたかわかんじょうの松明に火が点される。赤々と燃える松明を乗せた筏は、10人ほどの若者によって操られ、ゆっくりと



かわかんじょう



松明への点火の様子



筏を川に運ぶ様子

川を下る。その際、若者たちは「うっ、うっ、うあ、はい」という独特の囃し声を川岸にいる地区の子どもたちに掛ける。子どもたちもまた「うっ、うっ、うあ、はい」と返す。この掛け合いを繰り返し水面に響かせながら、筏は神島橋の下流まで流されていく。かわかんじょうは、昭和 33 年(1958)の狩野川台風を境に、筏の材料の減少や、祭の担い手不足により簡略化される傾向にあったが、昭和 56 年(1981)には保存会が発足、今日まで保存会により継承されている。現在は、かわかんじょうの終了後に行われる「大仁夏祭り」の一部としても位置づけられている。

図 2-2-3 かわかんじょう 活動範囲の拡大図



ウ 狩野川台風をはじめとする水難者への慰霊

現在、伊豆の国市内では、狩野川右岸のおおひと地区、なかの地区、みかど地区、しらやまどう地区、田京地区、南條地区、左岸の神島地区、北江間地区に狩野川台風等の殉難者慰霊碑が存在している。

神島地区の記録によれば、同地区岩崎にある狩野川外諸川水死招魂碑の前では、明治 39 年(1906) 4 月の招魂碑建立以降、毎年 8 月 2 日に「岩崎念仏」を唱える「水難供養祭」を行っている。この供養祭は、かつては地区の婦人会が中心となっていたが、現在は神島区が主体となり、地区の女性たちが参加して行われている。



狩野川外諸川水死招魂碑
(神島地区)

白山堂地区は、狩野川台風で75名が犠牲になるという、甚大な被害を受けた。白山堂地区の記録によれば、狩野川台風が襲来した昭和33年(1958)11月には地区の合同葬儀、翌年からは合同法要が営まれ、昭和37年(1962)8月には、同地区内の白山神社参道入口に「狩野川台風殉難者供養塔」が建立された。この供養塔建立後、地区の人々が8月1日に狩野川台風被害者の墓にお参りし、その後、供養塔にお参りするという習俗が続けられている。

さらに、狩野川台風のみならず、狩野川とその支流では過去に幾度も水害が発生し、多くの犠牲者を出してきたことから、盆の時期には、そうした水難者に対する慰霊が行われている。

8月3日・4日に行われる狩野川まつりは、観光誘客を中心とした祭であるが、その一方で、狩野川への怖れと水難者への慰霊の営みを伝承する重要な機会ともなっている。昭和40年(1965)、水害対策のため、長年にわたって工事が続けられてきた狩野川放水路が完成。同年7月の『葦山民報』には、「この年の狩野川まつりは、狩野川放水路の完成を祝って盛大に行われる」との記事が見える。狩野川まつりが、狩野川台風の被害からの復興を祝い、洪水被害軽減への祈りを示す場として相応しいと考えられたのであろう。

南條地区の千歳橋のたもとにある慰霊碑(昭和5年(1930)の北伊豆地震と交通事故の犠牲者慰霊碑も隣接して建てられている)の前では、毎年8月3日に「狩野川台風殉難者慰霊祭」が執り行われている。この慰霊祭は、同日に千歳橋付近を会場として行われる「狩野川まつり」の一部として実施されている。

また、盆の時期に限らず、慰霊碑の前を通る地元の市民が、足を止めて手を合わせている姿が、今もなお見受けられる。狩野川台風の犠牲者に対する鎮魂の営みは、発生後約60年を経た現在でも、人々の暮らしの中に織り込まれているのである。



狩野川台風殉難者供養塔
(白山堂地区)



狩野川台風殉難者慰霊碑
(南條地区)



狩野川台風慰霊祭の様子

図 2-2-4 神島地区慰霊祭の活動範囲拡大図



図 2-2-5 白山堂地区の活動範囲拡大図



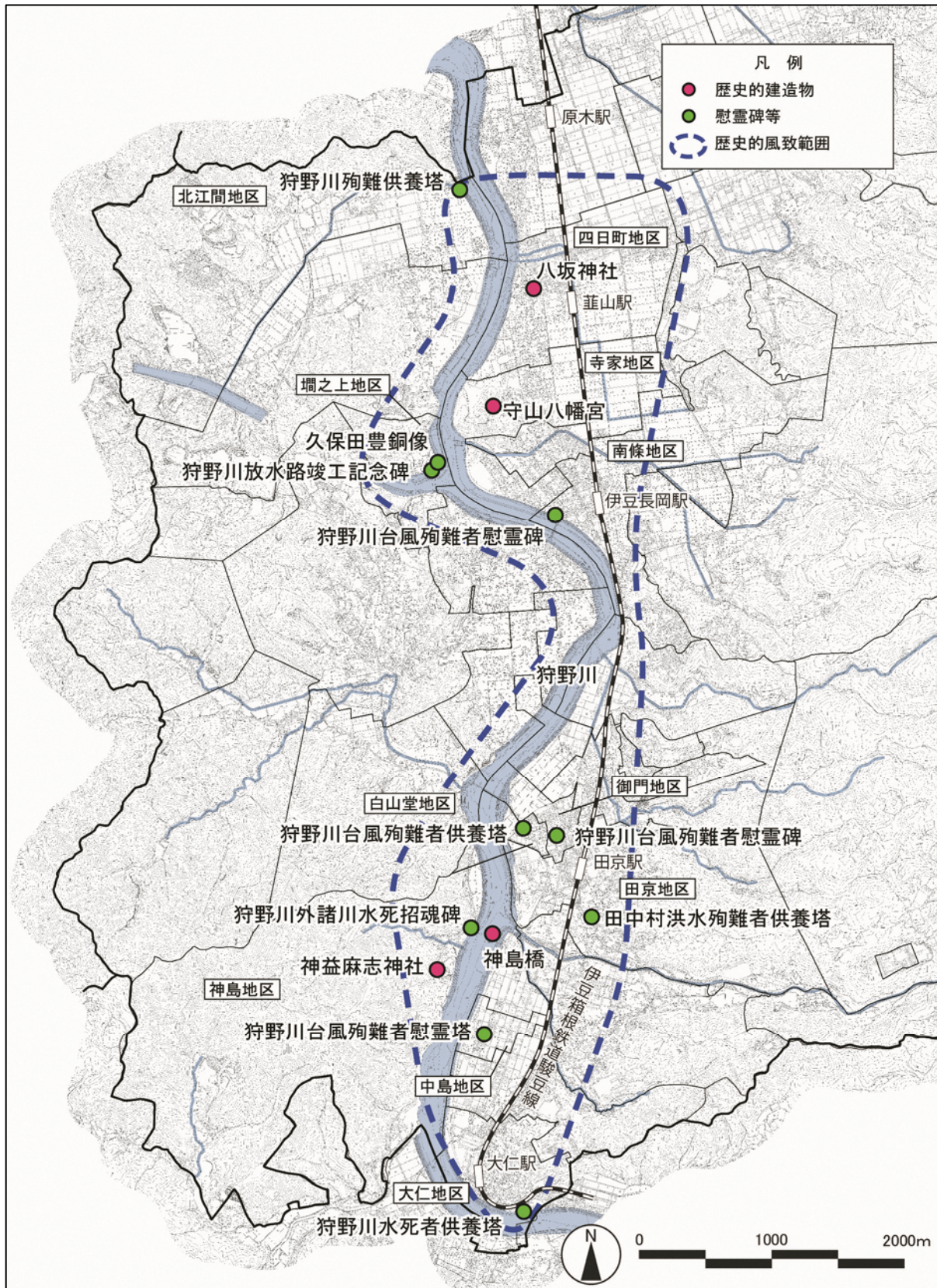
図 2-2-6 南條地区の慰霊祭の活動範囲拡大図



(3) まとめ

これまで見てきたように、狩野川は、伊豆の国市の人々の暮らしや信仰と密接に結びついている。特に、たび重なる水害の経験に由来する、水難を避けたいという強い祈りは、「かわかんじょう」や「お天王さん」という祭として今日まで継承されている。盆の時期に行われる「狩野川台風殉難者慰霊祭」など、水難者への鎮魂の営みもまた、狩野川と暮らす人々の心に深く根ざした習俗である。このような、狩野川をめぐる歴史的風致がみられる。

图 2-2-7 歴史的風致範圍図



【コラム 狩野川の水害と治水対策】

狩野川は、天城山地の北西斜面を水源とし、多くの支流を集めながら北流、伊豆市修善寺付近から平野部に出て、伊豆の国市、^{かなみちょう}函南町、清水町を経て沼津市で駿河湾に注いでいる一級河川である。上流部の天城山系が急峻な地形であるのに対し、中・下流部は勾配が緩く滞水しやすいという特徴がある。さらに、天城山系は年平均降水量が3,000mmを超える多雨地帯であり、狩野川は洪水が起こりやすい条件を備えている。

実際、狩野川流域は過去に幾度も洪水に見舞われてきた。江戸時代にも、たびたび水害が発生しているが、特に大規模で被害も大きかったのが、二度の「亥の満水」（寛文11年／1671、寛政3年／1791）と、「未の満水」（安政6年／1859）である。

明治時代以降においても、水害は繰り返し発生した。そこで、抜本的な解決策として、明治初年より「狩野川放水路」の開削計画が検討され始めた。放水路とは、狩野川本川から分派する水路を開削、駿河湾に直接放水することで、本川の流量を低減するものである。

狩野川放水路の開削計画は、放水路が通過することで耕作地や居住地が減少する江間村（当時）の全村的な反対や、駿河湾側の漁民たちの、土砂流出による漁業被害を訴えての反対運動などもあり、容易には進まなかった。その一方で、たび重なる水害により放水路開削への要望も高まりを見せ、中央政府への政治的な働きかけを含めた、放水路開削・本川改修運動が展開されていく。

昭和22年(1947)に、当時の葦山村長久保田豊が狩野川治水会会長に就任、会長として放水路開削の方針を決定し、以後強力に運動を推進していく。治水会は、従来の江間村を通る路線ではなく、^{ままのうえ}壺之上地区から内浦湾の口野に抜ける新路線を提唱。これにより、流路の延長が短くなるだけでなく、江間村内における田畑の減少も最小限に抑えられることとなり、江間村の反対運動も終息に向かった。漁民たちの反対も、港湾施設等の建設や補償金支払いの提案によって軟化し、昭和26年(1951)、狩野川放水路の開削工事はようやく着工に至ったのである。

工事が進行しつつあった昭和33年(1958)9月、「狩野川台風」が伊豆半島を直撃。この台風がもたらした集中豪雨により、各所で狩野川の堤防が決壊し、大洪水が引き起こされ



狩野川放水路



久保田豊胸像

た。死者・行方不明者 1,040 人を出す未曾有の災害であった。狩野川台風の影響は、放水路計画の見直しを迫り、当初 1,000 m³毎秒としていた放水路への分派量を 2,000 m³毎秒へと変更した上で工事が続けられ、昭和 40 年(1965)、狩野川放水路はついに竣工を迎えた。狩野川放水路の完成とその後の堤防整備・揚水機場整備等により、狩野川流域の水害は画期的に減少することとなった。そして、狩野川放水路は、完成から 50 年以上を経て、なお狩野川流域の水害対策の要となっている。

図 2-2-8 狩野川放水路位置図

